

## 聖浄二門判と称名

久米原恒久

『涅槃經』による仏性開悟を難証とした道綽は、約時被機論から仏教を二分した。そして此土入聖の道を聖道とし、その難証性を、時、機、教三者の不一致に求めている。そして『安樂集』第三大門に

一謂聖道 二謂往生淨土 其聖道一種 今時難証 一由去大聖遙遠 二由理深解微 是故大集月藏經云 我末法時中億億衆生起行修道 未有一人得者 当今末法 現是五濁惡世 唯有淨土可通入路

と示し、聖浄二門判を確立するのである。それでは、聖道門に対する二種の困難性は、どこに根拠を置くものであろうか。まず「去大聖遙遠」という第一由は、第一大門所引の『大集經』の五堅固説から導びかれたものと考えるのが妥当なものといえよう。それでは、第二由「理深解微」とされる論拠は、何処に見い出したものであろうか。まず、道綽が師と仰ぐ曇鸞は、『論註』の初めに、竜樹の難易二道判を引用し、難行道に五種の難があるとして、その第五に「唯是自力

無他力持」と論じて、難易を自他二力に開顯し、その教義を確立したが、この自力、他力という語句は、菩提流支の訳出した『十地經論』に、

依根本弁才 有二種弁才 一者他力弁才 二者自力弁才 他力弁才者 承仏神力故

と示されるものから導びかれたものであることは、諸学者も指摘されている。師の教学を継承する意図の強い道綽に、この『十地經論』の影響をみることは、不自然ではないと思われる。しかるに『安樂集』における同論の引用は、第七大門、「此彼の取相を明かす」という段落に、わずか一ヶ所見えるのみであり、聖浄二門判との関連は分明とはいえない。しかるに、この問題に対し三祖良忠は、『決疑鈔』において、『選択集』所引の聖浄二門判を釈した上、聖道難証の事由として、(一)微難証(二)難見難証(三)離念難証(四)悲地難証と四項目を對比せしめ、その典拠として『十地經論』を掲げているのである。ここに両者の深い関連性を知る手掛りがあるので

はなかるるか。そこで、本論をさらに検索してゆくと、同卷二に「初地歡喜地品」の文「微ニシテ知り難キ聖道ハ、分別ニ非ズ念ヲ離ル」を釈して

微者云何微 偈言難知聖道故 云何難知 謂說時難知 復云何難知 大聖道難知 大聖者所謂諸仏 是故言微 道者是因 修行此道能到聖処故 言難知聖道 此 微有二種 一說時甚微 二証時甚微 如是次第何故復難知 偈言非前別離念故 非分別者離分別境界故 離念者自体無念故 如是聖道名為甚微 何故甚難得 難得者難証故 是名甚微

というものがある。この論文こそ、恐らく道綽が聖道難証の第二由として示した「由理深解微」という文意に有機的に連関するものといえるのではなかるるか。

一方、「聖道」「往生浄土」という一對の名目について考察すると「往生浄土」という成語は、諸学者によって「論註」下巻の「随順往生浄土法門」という部分に、その典拠のあることが概に指摘せられている。一方、「聖道」という語句の典拠についてであるが、やはり右掲の論文中に示される「聖道」に求められると考えるのが順当のように思われる。しかし、この点については、『涅槃経』との関連をも加味してさらに考察するべきであろう。

ともあれ、『十地経論』こそ「自力」「他力」或は「聖道」「解微」などの典拠をなすものと推測するとき、期せずして

聖浄二門判と称名(久米原)

同論が、曇鸞、道綽、二祖の教判の思想的裏付けをなし、或いは重要語句を提供したという、甚大なる歴史的役割りを演じた事になるのは、誠に興味深いものといわざるを得ない。

しかし、ここで一考を要する点がある。つまり『論註』の「往生浄土」、『十地経論』における「聖道」、これらは直ちに判目として出されたものではないという事である。しかるに、別出せる二つの語句を対目とするに至った思想的必然性はどこに見い出されるべきなのだろうか。これについて、道綽の本宗が『涅槃経』にある事に着眼し、その「聖行品」を検索すると「聖戒、聖定慧」を具する者を聖人とし、仏菩薩のこととしている、又その行を聖行としたうえ、この成就是甚だ難行苦行なる事が品末に語られているのである。加うるに『大集経』に三学の滅尽が示され、道綽自らも行半ばに坐折せる体験を顧みる時、此土入聖得果を「聖道」彼土得生を「往生浄土」として対比せずにはいられない思想的必然性が表出するものと考えられる。かくして、時機相應の行相として、称名が立てられ、「若去聖近 即前者修定修慧 是其正学 後者是兼 如去聖已遠 則後者称名是正 前者是兼」と示されるのである。この前後兼正論こそ、充来、仏教全体の課題とされた定慧止観の行法と、称名念仏の対決を宣言する、重大なる意味を示すものである。三学から信仏への転換、これこそ、中国浄土教の成立意義そのものなのであ

二九九

た。この信仏とは清浄化に他ならないが、道綽はこの信を『大経』所説の第十八願に示される弥陀の願力、その功德の統攝体たる名号を中心に捉えているのである。だから、名号それ自体に、無上の功德の具備を認めている。これは勿論、師、曇鸞の釈義を継承せるもので、『論註』には弥陀の名号の功德を示して、次の如く説明している。

譬如淨摩尼珠置之濁水水即清淨 若人雖有無量生死之罪濁 聞彼阿弥陀如来至極無生清淨宝珠名号 投之濁心 念念之中罪滅心淨 即得往生……

衆生の心は無量生死の罪によって濁っている、しかし阿弥陀仏の清浄なる名号を称えれば、自ら罪を滅して濁心を清めることが出来ると云い、続いて見生智をも無生智に転換せしめる働きすらあることを示している。又上巻に「此十念者依止無上信心依阿弥陀如来方便莊嚴真実清淨無量功德名号生」と述べ、名号を称える心は名号に相応し、名号に依りて生ずる故に清浄であるとの主旨を示している。

これらは全て『安樂集』にも引用せられており、両者の念仏観は相似態とも云われるのである。しかし、末法罪濁の認識極深なる道綽は、以上既述の名号釈をもって、さらに現生での修善を提唱し、「若一念称阿弥陀仏……修常念即是恒懺悔他」として、称名の相統によって懺悔と清浄化を常に行すべき事を説いている。これは『大集経』が第四の五百年に位

置する衆生の為に教示せる修相、つまり「正是懺悔修福、应称仏名時者」に込めるものである。さらに「如来名号能破衆生一切無明、能滿衆生一切志願」といい、問答によってその理を釈し、仏の名号は、法体に即しており、名体不離名体相即であるから、之を称すれば必ずその法体に有する功德が享受され、衆生の無明が破れ、志願が満ずるのだと説いている。この名体相即の義は曇鸞釈解の面目を示すものでもあり、後世に法然が「万徳所帰」の名号釈を成就した思想的根拠の一つであるとも言われている。以上の如く、約時被機の立場から、戒定慧にかわって、弥陀の名号功德が顕揚せられたわけだが、その根底には『涅槃経』に代表される自力法門への痛烈な批判が存在するということだ。では曇鸞に発するこれら仏名号の重要視は、いかなる観点に基づくものであろうか、それこそ『観経』の下下品の経説に視点を置いて『無量寿経』所説の第十八願を読みとった達見のたまものである。この点で二師の名号観の背景に、阿弥陀仏の本願の存することを忘れてはならない。而して、曇鸞が「心無他想十念相統、名為十念。但称名号亦復如是」と示した十念釈義に基づいて、道綽は「大経云、若有衆生縱令一生造惡 臨命終時十念相統称我名字 若不生者下取正覚」と云って末法衆生の往生行を帰結せしめたのである。（註略）